

嬉望

第2号

令和5年1月17日

兵庫教育大学

教職大学院

学校経営コース

編集部

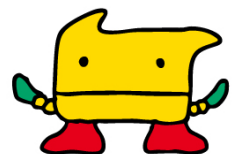
(西本 河上)

「嬉望」は、本学加東キ

ャンパスが嬉野台地区

にあることと、「希望」と

をかけた造語です。



理論と実践の融合

現場での「実践」と大学での「理論」との融合を確立させるべく、学校経営コース二年生は約二か月間のインターンシップや佐賀県嬉野市教育委員会での教育行政体験（希望者）を行いました。また、一年生も知見を深めるべく、先進校訪問調査・教員委員会の研修や会議等の参観や傍聴等を行うフィールドワーク・第三者評価へ参加しました。

嬉野市教育行政体験

佐賀県嬉野市教育委員会

P2 池上 誠朗

本年度は十月下旬に二名、十一月中旬に二名が参加させていただき、私は第二陣の一員として、八泊九日、杉崎教育長の旧宅で仲間と共にお世話になりました。

金曜の午後に西九州新幹線で嬉野温泉駅に到着し、教育長自らの運転で嬉野市を案内していただきました。教育環境と各施設の充実に驚きました。夕方から第一陣の仲間が作成してくれた嬉野マップを手街に出かけ、初日から地元の方々とふれ合うことができました。

「教育施策の立案と評価」の授業で学んだ「校長先生の知恵袋事業」であると知りさらに感動が深まりました。月曜からの教育委員会でのインターンシップも、皆さんに温かく受け入れていただき、丁寧なご説明を通して委員会業務の具体と嬉野市の先進的な取組について学ぶことができました。多くの時間を教育長室で過ごさせていただきました。ご講話とシャドウイングを通じて、たくさん学ばせていただきました。フットワークの軽さ、状況把握力、記憶力と情報整理力、アイデアの豊かさ、先を見据える力、学び続ける意志等、驚きの連続でした。教育長の教育への愛、子供達への愛、先生方への愛、嬉野市と市民の方々への愛、同時に人々の教育長への厚い信頼を強く感じる毎日でした。書き切れない想いと思い出で一杯ですが、貴重な機会を

翌日の教育行事から参加させていただきましたが、土曜の大野原小中学校の文化発表会、日曜の塩田小学校のよかとこ祭り、どちらも素晴らしき催しでした。特に文化発表会での地域に根差した学びの発表、修学旅行生の心のこもった長崎平和学習の発表、参加者全員でのバイオリン体験交流、最後の平和を祈るバイオリンリサイタルは生涯忘れることのない感動的な体験となりました。子供は地域の宝物であることをあらためて実感しました。後日その催しが

いただいたことに感謝し、今回の学びを今後の教育活動に活かしていきたいと思えます。

インターンシップ体験

兵庫県立芦屋特別支援学校

P2 高越 美智子

八月十九日から十月十三日までの約二か月にわたり、現任校である兵庫県立芦屋特別支援学校でインターンシップを行いました。管理職からは、日常の業務観察やシャドウイング、指導助言や講話を通じて、教諭の立場では分からなかった学校運営の一端を学ぶことができ、俯瞰的な視点で学校を捉えることができました。

校長の姿からは、国や県の動向を把握して根拠を持って適切な判断をすることや教職員員の資質を的確に見極め個人に合わせた対応することを

学ばせていただきました。そして、多様性を大切に、お互いに認め合いながら前向きに仕事ができる組織作りを目指されていると理解できました。教頭からは幅広い業務内容についてご教示いただくと共に、校長と教員のパイプ役としての立ち振る舞いを間近で示してくださいました。また、教諭の立場では参加が難しいであろう校長会や学校訪問指導にも、校長のご配慮により参加することができました。

これらの活動を通じて、今後私が管理職としての力量を高めるために学ぶべきことが三つ分かりました。一つ目が適切な判断を行うために必要な根拠となる知識や情報を習得すること、二つ目が迅速な課題解決に向けて課題の本質を見極めること、そして三つ目がキーパーソンを巻き込んで協力体制を組むスキルです。教職員の皆様には、アンケート調査やインタビュー調査、授業参観、行事参加等の願いに応じていただき、研究を速やかに進めることができました。開校から所属している愛着ある現任校でインターンシップの経験ができたことは、私の教員人生の中で大きな財産

となりました。この学びの成果を兵庫県の教育に還元できるよう、より一層努力してまいります。このような貴重な機会を与えてくださった多くの方々にご心より感謝申し上げます。

加古川市立若宮小学校

P2 満石 大輔

八月二十九日から十月三十一日までの九週間、現任校の加古川市立若宮小学校でインターンシップを行いました。内容として、管理職のシャドウイングや児童、保護者へのアンケート調査、教職員には、日々の何気ない会話からのインタビュー調査をさせていただきました。学校改善プランの鍵となる材料を得られた貴重な期間でした。

校長の姿からは、「情報発信力」と「地域へのアピール力」を学びました。行事の映像を動画編集しメール配信で保護者へ提供し、毎日数回のホームページやブログ更新を行う。保護者や地域のつながりを意識した情報発信は学校信頼に大きな影響を与えていることを改めて理解できました。また、毎朝自転車で校区内を走り、児童の登下校の様子を見守りながらのパトロールにも

同行しました。地域の方々とお話をしながら、学校の顔である校長が自ら地域へ出かけることは、安全安心で信頼される学校づくりにとって非常に効果があると感じました。

教頭の仕事では、膨大な業務量の中、教職員、児童、保護者と積極的なコミュニケーションをとる調整力が最も印象的でした。さらに、地域の方々やPTA役員との関係性をより良いものにしようとしている様子や困難を抱える子どもや保護者との関係を築こうとする姿勢も学ぶことができました。今までの立場では見えにくい部分を体感し、信頼される学校のために力を尽くす方法を実感することができたのは、今後の自身のキャリアに大きく影響を及ぼすことと確信しています。

研究者という立場での関わりの困難さは感じましたが、これらの体験ができたのは、現任校の教職員の皆様の温かな配慮や心配りがあったからだと感じています。皆様に研究成果を還元できるようにするとともに、このような一教師では得られない貴重な学びの機会を与えてくださった大学院の先生方、兵庫県及び加古川市教育委員会の皆様に感謝

謝申しあげます。



フィールドワーク

鳥取県教育訪問調査研修

P1 尾縣 大矢

十月二十六日（水）に浅野ゼミの三名は、鳥取県にフィールドワークに行かせていただきました。まず、最初の訪問先である岩美町教育委員会、大西教育長にお話を伺う

ことができました。私自身は、教育長という立場の方に直接お話を伺うことが初めてだったので、とても貴重な経験となりました。

次に同じゼミの河上さんの現任校である岩美町立岩美北小学校を訪問し、五年生の算数の授業を参観する機会をいただきました。しっかりとした授業規律の中で、子供たちが活発に意見を交換し合っていました。またICTをはじめとする学習教材も効果的に使用されており、素晴らしい授業でした。

そして、午後からは修了生の山名先生が校長を務めておられる倉吉市立成徳小学校を訪れました。成徳小学校は、来年度から近隣の小学校と統合することが決定しており、その中で教育活動のご苦労をインタビューでお聞きすると同時に、子供や教職員への愛情にあふれた山名先生の人柄に触れることができ、私の中での「めざしたい管理職像」のお手本を見せていただいた気がしました。

最後に、同じく修了生の竹中先生が教頭を務めておられる鳥取県立倉吉東高等学校を訪問しました。倉吉東高校は、九月に日本海側の学校として

は初となる国際バカロレア教育ディプロマ・プログラム認定校となりました。国際バカロレア教育の素晴らしさや理念の崇高さにはとても共感できる部分が多く、推進していくことの意義は大きいと感じました。その一方で、教員側の準備の大きさや指導体制の維持の問題、生徒側の負担の大きさなどを勘案すると、公立高校にはとてもハードルの高い挑戦だとも感じました。そこに向かっていく覚悟を管理職の先生方のお話から窺い知ることができました。

今回の鳥取県への訪問は、まさに学校経営コースに来たからこそできた経験であり、先生方や修了生の方々から築いてこられた伝統の素晴らしさを実感することができました。改めて、この恵まれた環境にいることに感謝するとともに、この経験を生かせるよう、今後の学修により一層力を入れていきたいです。



西はりま学校づくり

セミナー二〇二一

P1 岡本 由佳子

八月十九日(金)に兵庫県立姫路労働会館で開催された西はりま学校づくりセミナーに参加しました。このセミナーは、コミュニケーション・スクー
ルや共同学校事務室の取組が、子どもの未来を切り拓く力につながる
と捉え、教職員の自己理解を深め行動する意識を
培うことを目的として行われています。

このセミナーには多くの学校事務職員の方が参加していらつしやいました。ワークショップでは、地域連携について、未来の目標や現在の状況について話し合いました。学校の課題について一緒にお話しすることで、学校事務職員の方が、どのようなことをお考えになりながらお仕事をされているのか知ることができました。私たちは教員と仕事の内容は異なりますが、「学校を良くしたい、子どもたちのためになにかしたい」という学校や子ども達への思いは同じであると感じました。この話し合いを通して、私は、学校事務職員の方が学校とともに作っていく仲間なのだという
ことを強く感じました。

また、私がこのセミナーに参加して、最も心に残ったのは「対話」の重要性です。管理職とメンバーの良いサイクルを回すために「対話」が必要だと感じました。「対話」することで、信頼関係が構築でき、メンバーのモチベーションが上がり、自発的に行動できるようになるのだと改めて学びました。

この他にも、いろいろなフィールドワークに参加させていただきました。フィールドワークは、「百聞は一見にしかず」ということわざが、まさにぴつたりと当てはまる貴重な体験でした。新しい刺激や発見が多く、自分について客観的に考える機会になったと思います。これらの経験を今後の研究に活かせるよう、これからもしっかりと学びを深めていきます。

名古屋市教育センター

ミドルリーダー研修

P1 田代 昌平

ミドルリーダーの育成に関する情報を得るため、八月十二日(金)に名古屋市教育センター主催のミドルリーダー研修を見学させていただきました。研修は中堅教諭(三十五歳から四十五歳)を対象に、

学校の戦略マップ作成を通して、学校マネジメント力を高めることを目的として行われました。

学校の戦略マップを作成する際には、SWOT分析を用いて、自校の内部環境、外部環境それぞれの現状把握を深め、戦略の方向性を明確にしていきます。そのため、参加者は、事前に自校のSWOT分析を作成して研修に臨んでいました。SWOT分析とは、「組織における内部環境と外部環境を分析し、今後の方向性や戦略を立案する際に用いる経営手法」で、強み(Strength)、弱み(Weakness)、機会(Opportunity)、脅威(Threat)の頭文字をとったものです。

学校の戦略マップは、①めざす子ども像、学校像(夢に向かって進める生徒など)、②SWOT分析を用いた現状把握(学力不振など)、③現状からめざす姿に近づくための重点事項(文武両道など)、④三年プランの各種取組・活動(小中高連携など)の手順で作成を行います。参加者は自校の様々な特徴を捉え、めざす姿にどのようアプローチしていくのか、考えを巡らせていました。

今回の研修を通して、名古屋市
のミドルリーダーには、

校長が掲げた学校経営目標を具現化するために、全職員で共有し実践していく、マネジメント力が求められているのだと理解しました。しかし、実際の学校現場では、多様な考えが存在するため、同じ目標を共有して行動するには難しいことがあります。そこで、校長の意向をすばやく現場に浸透させつつ、現場の意見を汲み上げるようなミドルリーダーには必要だと気付くことができました。

加東市立東条学園小中学校

施設見学研修

P1 江濱 悦子

学校に入ると「こんにちは」という生徒達の元気な声が歓迎してくれました。学校っていいな、と思う瞬間です。校舎は光に満ちあふれています。できたばかりのピカピカの校舎、一万六千冊を誇り、子供達の興味をそそるようおしゃれにディスプレイされた明るい図書館、子供達が自由に走り回る「つながりの庭」、東条川を横目に伸び伸びと遊べるプレイグラウンド。こんなに充実した学校施設で学べる生

徒と先生方は幸せだな、と羨ましく思いました。

しかし、充実しているのは施設だけではありません。四・三・二制で運営され、単に小学校と中学校が連携しているということでは言い表せない新しい形の義務教育学校。九
年間で生徒は何を学ぶのか
が系統立って一冊の本で示されているシラバス。学校と家庭が連携して子供達の学びを支えられるように作成された「家庭学習のすすめ」。校長先生が大事にされている「つなが・つながる」という言葉で子供達が行う九年間の様々な活動が有機的に結びついており、九年間を見通したカリキュラム設計が行われていました。グラウンドデザインも「学びの向上」と「つながる力」の両輪で、学校教育目標の「自ら学びこころ豊かにたくましく生き抜く学園生の育成」に向かう道筋がわかりやすく構成されていました。また、地域とのつながりも学校運営協議会で推進されており、「地域に根ざした学園にしたい」という校長先生の思いが詰まっています。

そして教員の組織運営にも工夫が見られました。小中一貫教育では小学校の組織文化

と中学校の組織文化の違いで「異文化衝突」が起きていることをしばしば耳にしますが、校長先生は「うまくいかないことはない」と断言されていました。そのお言葉のとおり部活動の指導・プール指導などにおいて小中の先生方はお互いに支え合っておられました。東条学園の先生達も子供達も表情がどことなく柔らかく穏やかであるように感じました。

「つなぐ」というキーワードがこれほどにも学校の問題を解決するのだと驚きました。



第三者評価

神戸市立科学技術高等学校

P1 山崎 邦夫

十一月十一日（金）、「学校

マネジメントによる組織活性化」の授業の一環で、神戸市立科学技術高校の、第三者評価を行いました。授業では、学校が掲げる「学校ビジョン」

「学校教育目標」に基づき、「目指す学校像」「育てたい生徒像」の実現に向けてどのように学校組織を活性化するかについて講義や演習を通して学んでいます。今回の第三者評価では、授業で学んだことや、それぞれが現場や生活の中で経験したことを生かし、神戸市立科学技術高等学校の課題や改善の方向性を提示することを目的として取り組みました。

当日、学校訪問し、生徒たちの登校の様子を挨拶を交わしながら観察しました。その後、校長、教頭から学校の概要の説明を受け、授業見学を行い、先生方や生徒代表にインタビューを行いました。

これまで、第三者評価の評価者となることはもちろん、勤務校でも第三者評価に立ち会ったり、インタビューを受けたりすることがほとんどなく、この実践自体とても新鮮なものでした。実際に現場を観察し、そこで働き、学んでいる人たちの生の声を聞き、学校外の人間が忌憚のない意

見を提示することの大切さを感じる事ができました。また、評価者である我々大学院生の間でも、様々な捉え方があることが分かり、報告書をまとめるための協議が、学校の在り方や組織の活性化、人材育成の方策などについて理解を深める機会になりました。



先進校訪問調査

山梨県ひばりが丘高等学校
宮崎県立宮崎東高等学校
福岡県立朝倉東高等学校
京都市立京都奏和高等学校

P1 和田 陽之

現任校の課題を意識しつつ、新たな取り組みとしての知見を得たく、四校に先進校訪問

調査を行いました。主な課題意識は特色ある取り組みの定着と、継続性を人材育成と組織の両面から考えていきたいというものです。

訪問させていただいた学校は、山梨県立ひばりが丘高等学校（定時制）、宮崎県立宮崎東高等学校（定時制）、福岡県立朝倉東高等学校（全日制）、京都市立京都奏和高等学校（定時制）です。それぞれ、地域の活性化や、株式会社経営、探究学習、学び直しに大きな特徴をもった学校でした。各校とも資料をもとに丁寧に説明をしていただき、授業見学や施設見学もさせていただきました。

ひばりが丘高校の「ひばりのドリカムプラン」については、不登校経験者が半数を超える生徒の現状から、自己肯定感や自己有用感を高める取り組みとして、探究活動・キャリア教育・体験学習・創作授業・地域連携に熱心に取り組んでおられました。なかでも香川県に負けないうどんの町を目指して取り組まれている「うどん部」の活動はとても興味深いものであります。

また、宮崎東高校の「総合的な探究」の取り組みも興味深いものでした。「定時制でも、

定時制だからこそその探究活動」として一年次の自己探求（哲学対話）から社会探究、進路探究と学びを進める。その取り組みも大変興味深いものでしたが、ご説明頂いた先生方から熱い思いを語っていただき本当に良い学びの機会になりました。先進校視察を通して、各校の取り組みだけでなく、その取り組みを行っている人材や組織について校長をはじめ副校長、教頭にお聞きすることができました。

先進校視察を実施する中でいくつかのポイントが見えてきたように感じています。対応いただいた各校の先生方に改めて感謝したいと思います。そして、先進校の様々な取り組みを参考にし、現任校の課題を整理し、研究を深めていきたいと考えています。

